



緘黙児の自己意識

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2017-07-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 竹内, 久美子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.32150/00007801

緘黙児の自己意識

竹内久美子*

緘黙児の理解と治療的アプローチに関する研究の中で、近年内面へのアプローチの重要性が指摘されている。

筆者は緘黙児のより深い理解と治療の手がかりのために、緘黙児の自己意識を明らかにしようとした。その方法は、①全道の児童相談所に依頼し得た緘黙児26名についての横断的分析、②自己意識に関する資料（SCT・その他）の分析③K中学校の協力により参加観察が可能となった一名の事例研究の3つを採用した。その結果明らかになったことは、1)発症時期が3歳～7歳に集中している。2)症状に多様性があり、しかもそれらは相互に移行的である。3)緘黙に由来する学業不振がある。4)乳幼児期における親との接触経験が少なく、現在の家庭に対する評価がnegativeである。5)内気・自信欠如・孤独・神経質・攻撃的・過敏・頑固ということが彼らの性格特徴としてまとめられる。6)外界の知覚に歪曲や遮断の傾向が認められる。7)緘黙児は現実世界に適応したいという切なる願いをもっていながら、自己実現への努力を放棄せざるを得ない状態にあるため、自己意識に限局や歪みが認められる。一般に人は自己の理想とするところに少しでも近づくために何らかの現実的手段を用いて日々努力するが、緘黙児にそれは認められないことがある。自己実現という観点から緘黙の症状をみると、夢・空想によって自己を実現する段階から、攻撃的な行為・イタズラ・幼児返りにより自己実現しようとする段階、そして表現活動がおさえられ身体反応まで限局されている、というような三つの段階があることを仮設的に提示した。

(キーワード：緘黙，自己意識，表現)

1. 目 的

「話せるのに話せない」状態にあるといわれる緘黙の子どもたちがいる。各分野における臨床家は緘黙症を何らかの心因性反応と捉え、適切なアプローチにより治療可能という見解のもとで実践や分析的研究をすすめてきた。しかし、現実には治療のための適切な場を見い出せないままに、特殊学級や精神薄弱者施設に処遇されるケースも少なからずあり、効果的と論じられている治療やこれまでの研究知見が必ずしも子どもに還元されているともいえない状況にある。

筆者は、幾人かの事例と接する中で、彼らの生きる過程でやむなく生じてきたつまづきへの深い理解と継続的支援が充分には成されていない現状を痛切に感じると同時に、一人ひとりの子どもを生かすにはもっと子どもの内面を見つめ、その心のひだを感じとることの大切さを強く感じた¹⁾。緘黙児の心理、とりわけ内面に関する考察は彼らを理解するには必要なアプローチといえるが、方法論上の難しさもあり、登校拒否のようにそこに切りこんだ研究は少ないように思う。

本研究は緘黙児をより深くまた内面的に理解するために、C.R.ロジャーズの自己理論²⁾に立脚し、彼らの状態像を決定する要因の一つと考えられている自己意識を①緘黙児26名についての横断的分析、②自己意識に関する資料（SCT・その他）の分析、③事例研究の三つのことを通して明らかにすることを目的とする。

2. 方 法

緘黙は発生頻度が低いこと、またその状態像の特殊性から彼らの内面に関わる資料を収集することは極めて困難であるため、資料の収集にあたって全道の児童相談所に協力を依頼した。

その結果、緘黙児26名の事例についての解答と自己意識に関する資料（SCT・その他）を収集することができた。筆者はこの26名の資料と、旭川市内のK中学校の協力により参加観察が可能となった1名の事例（A子）の経験をもとに、彼らの行動特徴や認知の外枠をつかみ、緘黙にならざるを得ない心理的世界をおさえ、とりわけ自己意識の現れ方について考察を加えようと思う。

3. 26名の状態像の考察

収集した26名の事例（内8名を表1に示した）をもとに、緘黙児の状態像について整理すると、大要次の7つにまとめられた。

①発症時期が3歳～7歳に集中している。②症状は幅広く、移行的である。すなわち、学校で友だちとお喋りをする・教科書の斉読だけはする・行動は静止がちで他者の援助なくしては何もできない・行動面で不自由さは見られない・身体的筋緊張がみられることもある。③緘黙からくると思われる学業の遅れがある。④家庭環境的に、特に乳幼児期において実父母との接触が少ない。また、実父が長期にわたり不在がちである。⑤家庭内において比較的自由に行動し、話もする。⑥内気・自信欠如・孤独・神経質・攻撃的・過敏・頑固ということが彼等の性格特徴としてまとめられる。⑦不登校に至ることもあ

*北海道教育大学情緒障害教育教員養成課程

表1 9 事例の概要

ケース性	発症年齢	知能	家族構成	養育態度	行動特徴と性質	緘黙の対象	随伴症状	症状の経過・その他	処遇	予後
A・♂	五歳		実父 実母 兄	放任。	無気力・短気・攻撃的・恥ずかしがり。非社交的。買物に行けない。	家族・近所・友達を除くすべて		小学生の時、学習時はじっと座っているだけで、手とり足とりの指導を必要とした。身体を動かすことが好きで、休み時間には特定の友達とプロレスごっこをする。腹痛など必要に迫られた時は教師にも話をする。嫌いなことに対しては緘黙をもって抵抗する。家では、ふて寝していることが多い。 小学6年時には怠業と思われる欠席がみられはじめ、中学入学後不登校となる。	中学校は一応卒業。	不明
B・♂	五歳		実父 実母 妹(2人)	過保護 実父は子煩悩、 実母は無口である	小心・過敏・孤独強情・無気力・自信欠如・自己中心的・非社交的。	家族を除くすべて	チック	実父は漁船員で長期間家を空ける。実母は無口なので、家族間での会話はあまりない。6歳～12歳まで断続的に遊戯治療を受ける。8歳から12歳迄、虚弱児施設に入所する。帰宅後著明な変化はみられない。中学卒業後、就職のための面接をするが対人面で失敗する。		悪い
C・♂	幼児期		実父 実母	過保護 特に実母において 顕著である。 実父は暴力的である。	無気力・内気・神経質・過敏・孤独 自信欠如・小心・非社交的。	実母とのみ会話	小さい癖あり。給食で鉛筆をかじり、便紙に近づく。	常に前屈姿勢でそれを崩さない。青白く無表情である。本児1歳半頃、3歳の兄が脳腫瘍のため入院し、本児への養育の手は相当に省かれた。本児6歳時、自転車に乗って自動車がぶつかり10日程入院する。実父は職人気質で酒が入ると本児を怒鳴ったり、時には殴ることもあった。	精神入所。薄者施設	は社会的自立
D・♂	七歳		実父 実母 姉 妹	放任とまではいかないが消極的。あきらめ型。実父は無口で近所との付き合いはない。	強情・非社交的、 頑固・筋緊張は非常に強く、家庭を除いては行動静止がち。	家族を除くすべて	夜尿	生育上、始語の遅れがあった。小学2年時、学校では全く喋らないし、集団行動はとれない。成績はよくない。学校へは行きたがらない。本児の姉も学校へ行きたがらないことがあったが本児ほどではなかったという。 自分よりも年下の子と遊ぶ。中学入学校、他人との面会は拒否的だが、家庭では家事手伝いをしたり、散髪等の外出もあり、行動範囲は広まりつつある。		良好のきざし
E・♂	五歳	精神発達遅滞(軽)	実父 実母	子どもの要求や欲求を受けとめたりくみとることをしない。 時に理由なく本児を叩くことがある。	神経質・攻撃的。 思うようにならないと嘔吐することもある。女性のプロマイドを見せると必死に逃げ回る。	実母とのみ会話	手異常発汗	幼少の頃、1人で遊ぶことが多かった。小学校高学年の時、虫の居所の悪い実父にひどく叩かれた。それ以後萎縮がひどくなる。本児は女子に蹴る等の嫌がらせをする。中学入学後、他児から無視されたりいじめられ、孤立し怠けがちになる。まばたきがひどくなり、実母に暴力をふるうようになる。この後、実母以外の人に何を聞かれても話をしなくなり不登校に至る。親の顔を伺い機嫌をとることもある。	家庭更生施設入所後入所。精神薄	社会的自立は困難
F・♀	四・五歳		実父 実母	放任・過保護 祖母が実母に本児を触れさせないようにし、本児の乳幼児期の養育にあたる。	内気である。未知の人・場所に対する緊張感是非常に強く、実母と一緒に居たがる。	家族・特定の人を除くすべて	特定の音が不明瞭	小学校では教科書を音読する時のみ発声する。小学校4年の頃、赤ちゃんことばを級友に指摘されいじめられる。自分を助けてくれない教師に対しショックを受け不信感を抱く。小学6年時に、あることへの葛藤のため髪が抜ける。中学入学後、不登校に至る。本児自身もその状態を気にし、付き添い人と一緒に登校するようになるが、教室には入れない。家では友だちと外出するようになる。実母以外の人の前では、食物に手をつけなかったが、現在は食べれるようになった。		良好の兆し
G・♀	四・五歳		実父 実母 兄 妹 祖母 叔父	民主型 特徴的なことはみられない。 祖母は本児を溺愛する。	内気・強情・自信欠如・非社交的・おとなしい・恥ずかしがりや。	家族を除くすべて		幼少時おばあちゃん子であった。本児の幼少時に実父は出稼ぎのため長期不在だった。本児は夜寝る時も、祖母と一緒にであった。家族とは普通に話をする。 8歳頃、緘黙は一応完治する。		一応完治
H・♀	六歳	境界線下から	実母 姉	過保護。	内気・自信欠如 非社交的。	家族と近所を除くすべて	失禁	小学4年生の時、実父が死亡する。平素、実父に可愛がられていた本児はかなりのショックを受ける。 中学入学校、学校ではトイレに行かないため、失禁をする。給食は食べない。		やや悪化
I・♀	七歳頃		実父 実母 姉	放任 共稼ぎで子どもとの接触・対話が乏しい。就学前は祖母が本児の養育にあたる。	内気・自信欠如 表情は硬い・臆病。家庭では大声で話をしている。	家族を除くすべて	遺尿	幼少の頃から、一人遊びが多く外で遊ぶことは少なかった。親は多忙のため、小学校2、3年になるまで本児が緘黙であることに気づけなかった。 小学校4年生頃、友だちに意地悪をされたり学校から「内気で困る」と言われたが、学校を休むことはなかった。 中学入学後、学校の玄関から中へ入ろうとせず、うろうろしていたり、給食を一切食べないようになる。 その後、学校内において、1～2名の子と話せるようになる。	担任との話し合い。相談機関	良好の兆し

る。

これら7つの特徴はいくつかの事例に共通してみられたがすべての緘黙児にあてはまるものではなく、緘黙児をみるひとつの手がかりと考えておくべきであろう。

4. S C Tの分析

S C Tを分析するにあたって、対象事例の状態の概要を参考までに説明する。つづいて、S C Tの刺激文に対する記述のうち自己意識に深く関係していると考えられる記述内容をとりあげ、彼らの自己意識の現れ方について分析する。

Y子：13歳 中学1年

友だち、家族を除いて緘黙である。緘黙以外の随伴症状は見られない。性格は負けず嫌いである。実母・姉・Y子の3人暮らしである。Y子にとって実母は優しい存在である。親の養育態度は放任である。

「はずかしいと思うことは」……みんなの前にでていくこと。友だちとはあまりおしゃべりができない。「よく」……暗いといわれるが自分ではそうは思わない。「けんか」……はしたことがない。けんかするほどはらのたったこともない。「私を苦しめるのは」……自分の心や気持ちだと思っている。「もしも私が」……夢である旅行会社につとめることができたなら世界中を旅行したいと思う。「大きくなったら」……自分の思った仕事についてがんばっている。今よりもずっと幸せになりたいと思っている。「私の空想は」……動物にかこまれてくらししてみたい。「不平は」……あると思うけど自分でもよくわからない。

M子の場合、皆と話ができないという自己の現状に、決して満足してはいない。いろいろと思ひ感じるところはあるが、それを努めて意識しないようにし、将来における理想像を思い描くことで、現状に満足しようとしている。

S男：14歳 中学3年

S男の状態は先に示した表1のケースCに該当する。

「家の人は」……とてもくらいです。「僕は母を」……時々にくたらしいと思ったことがあります。「僕の一番ほしいものは」……ありません。「好きなのは」……ありません。「いやなのは」……別にありません。「こわいことは」……ありません。「はずかしいと思うことは」……人前でです。「僕は友だちから」……バカといわれます。「努力しているのは」……皆と遊ぶことです。「どうしても僕は」……しゃべりたくありません。「ぼくができないことは」……買い物です。「僕のクラスでは」……できるのが多いです。「皆はぼくのことを」……バカだと思っています。「僕がうらやましいのは」……生きています。「もしも僕が」……空をとべたいと思います。

S男には自分の周りにいる人は皆優れて輝いてみえる。そして、愚かな自分が何を望んでもだめなんだと思ひ、現実世界で生き生きと活動している他者を横目で羨望の

目で見つめている。

K男：13歳 中学1年

実父・実母・兄・弟・祖父・K男の6人家族で、家は農業を営んでいる。K男はほとんどすべての人・場面对して緘黙である。話かけに対して口をつぐむか、頷く、首を振るなどの意思表示をする。全身を硬くする。親の養育態度は過干渉である。

「学校から帰ってぼくは」……すぐファミコンをする。「御飯の時は」……一人で食べる。「好きなのは」……みかんです。「お母さん」……こわいです。「お兄さん」……こわくてわるい人です。「僕を苦しめるのは」……お兄さんです。「けんか」……はしない。「僕の服」……じみな服ばかりだ。「僕はひそかに」……お金をためています。

K男の発症時期は4歳にさかのぼることと、その呈する状態像とS C Tの記述内容から、緘黙児にとって唯一のやすらぎの場ともいえる「家庭」がK男にはなかったということが考えられる。人はつらいこと悲しいことが続くと、感じるこたえ嫌になり、感情の扉を閉ざすことがある。この扉の役目は感じていることを強く意識しないことや、その感じているところを身体にまで伝えない、つまり外に向かって表出・表現するのを抑制するところにある。このような内面が限局された状態が続くと、身体にまでも影響を及ぼすことにもなりうるし、更には内面の成長さえもおさえかねない³⁾。「僕の服じみな服ばかりだ」という言葉から、心も体も硬くなった限局された状態にありながらも、Y子・K男と同様の自己意識・他者意識・それにうっすらではあるが現実適応への願ひが感じられる。

このように、喋べらないということで表面的には非社会的に見てとれる彼らの自己意識の現れ方をみていくと、限局されてはいるが「皆と同じでありたい、現実世界に適応したい」という悲痛ともいえる願ひをもつことを3事例の中にもみることができる。

5. 事例研究

- 1) 対象児 A子 14歳 特殊学級在籍
- 2) 状態像

A子の緘黙は保育園の時より始まる。小学校入学後、担任教師の強い給食指導のため状態は悪くなる。小学校4年時に特殊学級に入級するが、卒業まで状態の改善はみられなかった。トイレに行かない・援助なしでは給食を食べられないというような状態が続いたA子だったが、特殊学級入学後、面倒みのよい一級上のT子と話をするようになる。現在は担任教師の問いかけに的確に答える。笑顔が多く、行動にも硬さが見られない、陸上部に入学し、他の皆と一緒に活動しはじめた。

- 3) A子の自己意識—行動と知覚の関連から—

毎週定刻に家を出るA子はその時間を1分でも過ぎると、玄関に立ち止まり、学校を休むということが過去にあったという。また、体育の授業中、教師が他の場所に

移動するように全体に指示したところ、A子だけポツンとその場に残っていたという。後に母親がその理由をA子に尋ねると、「周りの音がきこえなくなる」と話したそうである。

A子のように外界の音を遮断したり、人の話し声が2・3倍の速さできこえるという緘黙児の事例は先行研究においても報告されている。また、緘黙児は頑固だとか、こだわりがあるという話も耳にしている。これらの事実と先に指摘した緘黙児の状態像は第三者からみると、非常に不可解に思える。このような行動・知覚をする背景には一体どんな心理的背景があるのか、これまでの知見から次に考察する。

6. 考 察

緘黙児は人間関係を結ぶ以前において、自己と他者との間に何らかの差を感じ劣等感をもつことがある。自分が他者と同じでなくそれ以下と認知したとき、自己の存在を揺さぶられるような激しい衝撃をうける。

この劣等感の源には通常では考えられないほど深いレベルの不安があり、これが彼の内奥にピタリとはりついていて容易にはがすことができないほど頑固な性質をもっている。このような根深い劣等感に加えて、彼には現在起こっているあらゆる事象にはついていけないというあきらめに似た意識がある。対人関係成立を基礎とする現実世界は、一人一人から発せられるエネルギーが常にうごめき、一個の巨大なエネルギーの塊となっている。したがって、社会性が未成熟で過敏ともいえる彼にとって現実世界は過酷なまでの刺激となる。目まぐるしさや圧力を感じ現実世界にはついていけないと感じながらも、皆の活動している現実世界で生きたいという思いは強い。思いは強いが実際にどうすれば現実世界に適応していいのかがまったくわからない。そうこうしているうちに反応として出てきた緘黙により他者の視線を逃れ他者との距離をおくことによって自己を守り、かろうじて現実世界に参加する。かくして「緘黙」は現実世界に生きる唯一の手段にもなりうるのである。しかし、たとえ現実世界に参加(ex, イスに座っているだけ)できたとしても、皆と一緒に生きてはいないことつまり適応していないことを彼自身も認識していて、その状態を実に苦しいと思っている。そこでやむなく他者の参加しない自分だけの世界を築きはじめる。この自己の世界には彼自身がつくった彼自身に関する厳しいきまりがある。彼自身窮屈さを感じながらも律義なまでにそれを守っていく。彼の意識が自己の世界にある時、他者が何を言っても彼には聞こえていないということがある。まるで反応しない魂のぬげがらのような彼の姿を見て、他者が不思議に思うのも当然といえる。

以上から、現実世界において皆と一緒に活動したいという意識を持ちながらもそれを実現する手立てを持たない緘黙児の姿が浮かび上がってくる。

7. 緘黙児の自己意識一まとめにかえて

緘黙児はあまり喋らないということはどうしても他者との意思疎通が悪くなる。この外見から、知能や技能では人格までも判断されてしまいがちである。一見内気でなんとなく自信がなくて無気力に見てとれる彼らも、その胸の内には現実世界に適応したい(皆と一緒に生き生きと活動したい)という強い願いを秘めている。けれども実際は現実の目まぐるしい刺激に対決するだけで精一杯なのである。彼らのエネルギーの大半は現実世界参加のために消耗し、実際のところ自己に向けられるエネルギーはほとんど残されてはいない。結局現実世界に適応したいという願いは放棄せざるをえなく、ある者は現実から飛躍した理想的自己像を空想や夢でみることにより内心の安定を得ようとする。またある者はイタズラ・暴力・攻撃的な行為・幼児返り等の代償行為により自己の安定をはかっている。このような緘黙児の場合、自分自身を見つめる意識は強いといえる。しかし、中には自己が何なのか自己の存在について把握することができずに強い不安定感を抱いている者もある。他方、現在の自分に注がれる意識が薄く、動作も静止したような局限された行動をとる者もある。彼においては自分についてふれることを放棄・回避するために葛藤が通常のようにおもてに現れることがないため、無反応ととれる段階にまで至っている。以上、3～6から得た知見をまとめたものを作業仮説(表2)として提示する。

表 2

対象	行動・症状	知 覚	自己意識	自己実現	こころ	家 庭	発症
26名と先行研究	行動面で不自由のない者、行動は静止がちな者、トイレに行かない者、給食を食べない者、移動困難な者、こだわりをもつ……	○外界の音が聞えていない。 ○話し声が通常の2-3倍にきこえる。	○話したくても話せない。 ○何も話さない。 ○話したくない。	○現実には働きかけない。 ○作文発表をする。	○過度保護 ○放任 ○適切な承認与えられない	3歳-7歳	
A子	トイレに行かない、給食を食べない、移動困難ということがあったが、現在は給食の黙の援助のみ必要。緘黙のみ	○周りの音が聞えなくなる。 -知覚遮断-		○臆上節で活動する。 ○作文発表をする。	○過度干渉のみ	5歳	
Y子(緘軽熱度)			みんなと一緒に活動したい	○現実には働きかけない。 ○空想 ○夢 ○攻撃 ○幼児返り ○暴力	感 じ 難 け ず 確 信 的 な 意 識 が 表 露 的 に 示 され ない。	○放任	不明
S男(緘中熱度)	拒食 鉛筆かじり 常に前傾姿勢			○無反応 ○ほとんど働きかけない。	○乳幼児期の実母との接触不足、過度保護、暴力的。	○幼 児 期	
K男(緘重熱度)	すべての人に緘黙。全身を硬くする。				○過度保護	4歳	

本研究をすすめるにあたり、資料収集に協力頂きました全道の児童相談所の皆様、並びに助言を頂いた旭川市児童相談所の島山貞三先生、参加観察の場を与えて頂いたK中学校の校長先生、担任の先生そしてA子ちゃんに深く感謝いたします。

文 献

- 1) 島瀬直子(1987)：心因性緘黙児のための心理治療仮説，児童精神医学とその近接領域，19(4)，227-245
- 2) C, R ロージャズ (1967)：ロージャズ全集第8巻—パースナリティ理論
- 3) 大井正巳(1980)：選択緘黙と言語，児童精神医学とその近接領域，21(1)，8